

“三者面談”を変える

2025・2・19 重枝 一郎

先生方も十分に承知のことと思うが、教育には体験が大切である。100万回のお説教より有効であることは言うまでもない。

一般的に今の学校教育としての体験学習は大きく5つある。

一つ目は福祉体験。病院や介護施設などに行き、ハンディキャップのある方を介助したり、共に過ごしたりする体験である。お互いのことをよく知り、共生する実践力が身に付く。

二つ目は職業体験。キャリア教育の肝となる体験になる。仕事のおもしろさ、大変さ、輝いている大人に気付くことで、大人へのつながりを促す。

三つ目は自然体験。友だちとの合宿体験にもなり、友だちとの付き合い方、自然のよさ、親への感謝などに気付くことになる。思いやりは教えるより体験である。

四つ目は芸術体験。以前、黒のタキシードを着た整然とした楽団の大人たちがジャーンと演奏を始めた途端に生徒たちの心が震えるのが見た目でもわかった。本物の芸術に触れることは感動を与える。

五つ目は海外体験。グローバル化は、瞬時に世界情勢がわかる情報収集力や英語力の興味関心を高める。それももちろん大事だが、広い視野をもち、自分自身の足元について自信をもって語れることがもっと大事になる。その波及効果がある。

この5つはできるだけ義務制の中で行うことが重要と言われる。五つ目の海外留学は高校年代からが多いが・・・。

小学校は発達段階においてきめ細かに指導をするのが特徴である。これまで培ったノウハウを生かして6年間のカリキュラムを作成する。しかし、大学入試改革から始まる一連の高校、大学教育の変容や高校入試の新傾向の問題などは意識されない。多くの小学校の先生方の学生時代とは大きく変化している。その上で、小学校の先生に自分たちの“これまで”を変える必要性は？と問うてみると、やはり小学校より先のキャリア教育の視点は弱い。小学校6年間は劇的に変化するので、その6年間で一区切りの気持ちになるのも仕方ないかもしれないと思う。

前例のない取組として私が小学校の先生によく話すのは、キャリア教育の視点で“小6”に“中3”の取組を重ねて考えてみてはという話である。“中3”で行う、「進路学習会（保護者・生徒）」「三者面談」「出前授業」などを“中3”同様のやり方で行う。

◆「進路学習会」では、“中3”では高校の先生に話してもらうように、中学の先生が広報を兼ねてプレゼンする。これは、新入生学校説明会とは別物である。

◆「三者面談」では、児童が、中学校生活や将来について、保護者と担任にプレゼンする。中高校生なら具体的なキャリアプランをプレゼンさせる。これは、本校でも、すでにやっている先生もいる。小中高でやれば、3回は真剣に考えを深めることができる。実は、このことは4年前に赴任した際に先生方に配布したリーフレットの左下にも書いている。小学校では、学級懇談会の回数は他校種より多いが、来てほしい家庭はなかなか来てもらえないという。おそらく小学校では三者面談は行われていない。

◆「出前授業」は、現在でも公立の小中連携の中で行われている。中3、高3で行っていることを“小6”でもやることで、キャリア教育の視点ももてると思う。そんなにごいことにしないでいい。「体験」でいい。そして、このことは教師のキャリア教育にもなっていくと思う。中学が高校の先生、高校も大学の先生の話しを聞いて「今」を勉強している。本校の高大連携も大学の出前授業は当たり前だが、実際の大学のゼミに参加したりするようになっていく。これは、ぜひ継続させていきたい。

変化していく学校教育の中で、私たちには、「挑戦」のマインドが課せられている。

「なぜ、ずっと同じやり方をするのか」「それは最上位の目標につながっているのか」を問う。